後悔しない生き方と、上手な絶望の仕方

宛宮志貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
後悔しない生き方と、上手な絶望の仕方

【Ｎコード】
Ｎ６０３６Ｚ

【作者名】
宛宮志貴

【あらすじ】
「僕」の人生に後悔はない。
死にたくなるくらい絶望して、生きていたくなるくらい殺されたくなっても、後悔からくるそんな気持ちを打ち消すのは、いつだって悲劇を演じていた頃の大嫌いな自分だ。
後悔しない生き方を望みながら、上手に絶望して行こう。
そして最後、トラウマから逃れられたらいいね。

後悔しない生き方、なんて。
安っぽい言い方だと思う。
今時どうでもいい話だと思う。
今更どうでもいい話だとも思う。
それでも結局僕は、確実に生きているとは限らない一秒後、死に近づきながら思うのだ。口には出さずとも、声には出ずとも、思うのだ。
後悔したくねぇなぁ、と。
というのも、僕がこれまで何故か生きていた間の時間が、ひどく暗く悲しい物に思えてしまうからだ。
五年前僕は、親友に裏切られ、
四年前僕は、正義を裏切った。
三年前僕は、嫉妬に狂い、
二年前僕は、愛に狂われ、
一年前僕は、自殺を決意した。
たったこれだけの、どこかの漫画や小説などにありそうな五年間であったが、僕にしてみればこの五年間はまさに地獄といっても過言では無い、それは酷い五年間だった。
一生のうちのたった五年間。
しかし何時終わるか分からない一度きりの人生の中の五年間と思えば、同じ時間でも残酷なくらいの違いを感じてしまうのが人間――とひと括りするのは好きではない――僕という人間だ。
ちなみに、自殺は失敗した。
原因は感情だった。
どうやら僕は、どれほど追い詰められようと腹が減ってしまうタイプの人間だったらしい。
良く言っても悪く言っても呑気なのだと思う。

しかも「腹が減ったので死にませんでした」なんて理由ならまだ笑える余裕も出てくるが、この場合腹が減った云々は例えでしかない。現実はもっと酷いものであった。

「面倒くさいから死にませんでした」なんて。

自分の事ではあるが、一体どれほど人生という物に絶望していたのだろうかと、その痛々しさには鳥肌も立とうというものだ。

現在も面倒くさがりではあるが、この時が一番ひどかったように思う。

自分になど死ねる勇気も無く、死んでいいほどの価値も無く――生きていていい人間でもないけれど、でも死ぬのにだって金はかかるし迷惑だって生きている今の倍かかる。

ごちゃごちゃ考えてもどうしようもない事を考え続けるのが、どうしようもなく面倒で面倒で。

気づけば死ぬ事すら面倒になっていたのだ。

だから僕は自殺ではなく殺害される事を望み、殺意を抱かれても文句のないような人間になろうと努力した。

けれどもこれも失敗に終わった。

何故なら殺されてもいい人間、殺意を抱かれても文句のないような人間など存在していいはずがないからだ。

たとえそれが自分であっても。

人間をやめる事が出来ていない内は、

許せなかった。

個人的な気持ちで言うと、実は人殺しに限っては殺されても文句は無いだろうと考えているのだが、しかし自分すら殺せないような臆病者に、人を殺せるわけがなかった。

面倒くさいから、といって逃げた。

たった五年間のあれだけの経験で何をふざけているのだろうと呆れる人が正しい。

精神病は甘えだなんてちっとも思ってはいないけれど、しかしこの時の自分は確実に世界に媚びていた。

甘えていた。
気持ち悪いくらいに。
いや、もういっそ気持ち悪いと言った方がいい。
当時はまだ幼かったのだろうと、あれから数年たった現在の僕は苦笑するが、あの頃の経験という物はすっかり抜け落ちてくれないもので、むしろ忘れられないトラウマとなり果てたのだった。
でもそのおかげで、今では安心して悲劇のヒロインを演じられている。
自殺に成功したいつかの親友が言っていた、「後悔には人を休ませる効果がある」というのは本当の事だと思った。
「休みすぎは毒だから、一回にどっぷりはまって休憩するか、短く分けて休憩するといいだろう」とも言っていたかな。
間違っていたところで叱ってくれるそいつはいないし、大体怒るなんて感情を持ち合わせていませんとばかりにふるまう、絶望しきった奴だった。
死ぬことを希望に生きている様な。
そんなあいつは、ビルから飛んで消えた。
アスファルトに広がるあいつの姿は、今でも目に焼き付いて離れない。
そういうしつこいところは変わっていないようだった。
そう、人間なんて死んだって変われない。
変わる為には、それこそ相当の後悔と努力を必要とするのだ。
死ぬ程度じゃ変われない。
少なくともあいつはそうだった。
一度自殺に失敗してから、僕はもう死ぬ事を諦め、それなりにごたごたに巻き込まれながら生きている。
好きな物も増えたし、好きな人も増えた。
自分がしたい事も見つけたし、
自分がするべき事も見つけた。
それでも内面は、自暴自棄の、絶望しきった、真っ黒な、地獄

の五年間を過ごした時と何も変わらない、一秒を積み重ねただけの自分。
一秒という後悔を、
積み重ねただけの自分だ。
でも、それだから自分を認められる。
あれだけの後悔を全身にため、痛々しくも必死に耐えた自分がいるから、救われる。
後悔に押しつぶされそうな時は、僕は自分を肯定しようと頑張る。
少しでも肯定的に自分を見れたら、何も後悔することなど無いのだ。
今の自分があるのが、全てあの地獄のせいであると同時に、
今の自分があるのは、全てあの地獄の御蔭であるのだと。
そう認める事で、僕は後悔を打ち消している。
これから先、やっぱり僕は何度も何度も絶望するのだろう。
それでも、せめて生きていてほしいと思う。
生きていれば後悔を打ち消すことだってできる事を僕は知っているのだから、生きていてほしいと思う。
最後僕が死ぬとき、そのとき何も後悔することがないくらい、絶望して生きていきたいと思うのだ。
「……絶望ねぇ。あいつがよく使った言葉だったよな」
「ああ、死ぬ前まで、あいつは絶望について語ってたよ。それと、自分は何も後悔していないって。これからも後悔することは無いって」
「あいつらしいや」
「僕たちも、そう生きていかないと」
「そうだな、いい加減前向くか……」
過去の僕に別れを告げよう。
挨拶はしっかりしようというのが、あいつと出会った頃からの変な約束だった。

僕は振り返る。
「さようなら、僕。またいつか」
過去の僕は背を向ける。
「さようなら、僕。またいつか」

（後書き）

初めまして、宛宮志貴です。
初めての投稿となる短編のお話、「後悔しない生き方と、上手な絶望の仕方」は、楽しんで頂けたでしょうか？
初めての投稿がこんなに暗い話なのもどうかと思ったのですが、どうせだったらやっぱり最初から宛宮の雰囲気バリバリで行こうかと思いまして、結果こうなりました。
自分自身暗い話というか、こういう雰囲気の話がとても好きで、つい読むのも書くのも偏りがちだったりします。
　これから此処を使わせて頂こうと考えておりますが、これよりも雰囲気暗めの話が多くなってしまうかもしれません。
まだまだ未熟で至らない点も多いかとは思いますが、少しでも気にいってもらえたら嬉しいです。

ここまで読んで下さった方、どうもありがとうございました。
感謝の気持ちをもって、閉幕とさせて頂きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6036z/

後悔しない生き方と、上手な絶望の仕方

2011年12月20日01時46分発行